

Centimetres

KODAK Color Control Patches

© The Tiffen Company, 2000

Kodak
LICENSED PRODUCT

3/Color Black

White

Magenta

Red

Yellow

Green

Cyan

Blue

A

1

2

3

4

5

6

M

8

9

10

11

12

13

14

15

B

17

18

19



門 367
試 卷

水戸南陽原先生著

砦州



とらそ村を南陽先生乃あつくかめ並けるを定り原
又と味に「て尊く」とむるふがとを免のたせんと
ふといにあのとて、あといりとい、たを信る成せらひに
ゆるく因一志此又の助せん」と文化八年のま様本あり
ちりとい免ぬ



をさし海をぬせり礼をわらひ
まひなきにやゝあひをたれ
水戸清江醫系云與らとつこあわ
家よむつむて常子室温らむこ子
をい冊子を納りて来りい力を
乃ま子あるもの業を長とらゆか



七五中 中山序 一

火傷、極妙、某別、テ、火、某、三
ノ火、傷、ハ、極、妙、ナ、ル、秘、法、也
佛、堂、著、摺、り、附、ル
炮、術、家、秘、法

たりけねくまのふのかすにたし
 ちりへるも奇矢とらるるのつるにき
 境ももたせむくさるるに結るた
 めもといよあつく出あつたをける
 とこぬるるをこころいしくのよめ
 りり梓よ乃お集てにをさしと
 きお世よ純さんとすす何く事しこれと
 しめよまのしとくし清本やうい

成り記みらりもくし博中梅多
 乃長方をたしとく又持の用を
 示ししるこまをさるるけしは名と
 清くをいよるるはまやのりうと
 張くぬ清代めあましく其の
 系乃おふ余とこりしもあしお
 活し乳をわすさしとらるるに
 九の玉を念といおんらまに

三月三日
海に降るをみるに
うらやまの思を
しるるに

文化八年三月三日海軍

若菜序

行軍之際不可無若菜

書矣故明季兵書或

有若菜之譜若菜一門也

我邦山鹿氏勇備集亦
收一溪先生雲陣砲法
以倣其體例然以手觀
之皆似不便于用焉

水滸萬原子柔遠選倉
粹極救之諸方尊丁為一
編以為戰陣之備蓋其
策嶺採單捷而可奏効

於遠巡咄嗟之間者其用心
也切矣安可無傳乎及
其大夫中山公請予言書
諸簡端

久化庚午歲中秋

前一日

丹波元簡庶夫



古人の薬をばしむる中にも
はらひぬる所の薬をばしむる
疾をばしむるたぐひの疾を
のこす疾をばしむる疾を
薬をばしむる疾をばしむる
弘明の書にばしむる疾を

志をなす代より美をすむの如
くふはむる方にとくふるは
一にむけりしちふるは
二にむかひはつてしとの使ふ
こころもあつたしよるも
あつたふりし用をほつた

そまうしちむくひのこ
れ一むくひしむくひも
あつたむくひのこ
志の如く水戸の侍
氏の内なる州の
上戸とすむる

とてはなすにまふふ序のまをそ
ふしとくちくおさうあひはと
みそとくちくおさうあひはと
ふしとくちくおさうあひはと
あひはとくちくおさうあひはと
とてはなすにまふふ序のまをそ

とてはなすにまふふ序のまをそ
ふしとくちくおさうあひはと
みそとくちくおさうあひはと
ふしとくちくおさうあひはと
あひはとくちくおさうあひはと
とてはなすにまふふ序のまをそ

予の祖先、甲州よりつえあとの後、
 と東國に流るゝありし事、
 本藩より少佐に列し加ふ事、
 り大夫君の支属なりし醫を業と
 せしむる大人と其業を續ぐの
 時め、後で醫者になり、
 場まで近侍をきり、
 とは、恩遇の賜、先人の福

ありてあるんは、其の事をして、
祖たる馬は、集業に、
新さ、あらはれ、是等の特息感後の、
言、何れなるを、
て、此天息、殊遇じ、
誠、
か、
お、

は、
の、
か、
勝、
の、
一、
覚、
ふ、

經傳とて下子委命つたに陣中
に必留陣の儀ありしものなるは是に注す
たをて流ししを御ありし儀に實に
つら紫をたに馳まじし時宮に
有きし記ありしに時ひもあはせ
つに陣中をいし事、仕受ぬる
ふ記ぬる名ありしといふを紫
野を且に徳撫多也といふゆへ

海邊の儀ありし外に示さるる事
にありし也

文化改元甲子春三月原と興昌克記

かく記ありし記ありしと書けり
多にありしをてむにをてありし
ぬれありし七年秋なりし也

岩州目錄

飲食

防禦

毒烟

野陣

水脉

乃以

解毒丸

抄撰

馬病

息合

大瘡

蛇傷

氣絶

虫齒

膝氣

踏板

骨硬

とけぬこ

備急圓

金瘡

力帯

眩暈

舟車破

食傷

血為

廣東人參

末炷

やけど

防寒

溺死

凍死

厭鬼死

驚死

癱

瘡

淋

小瘡

茶湯

脱肛

臍瘻

毒刺

水あたる

魚毒

突目

救飢

此石中

飲食 ことあひ 事ことの府うらの之これ氣いきの鬱ふさがまて盛せい壯じやうの害がい氣いきを

りよあへずべて大だい事じは時ときは條じょうていを身みを情じやう

養やうふやう者もの一いつの志しとす人ひと一いつを身み病びやうある時

をさるいふ心こころをわふともを玉たまれ孫まごをい

更さらりの精せい神しん傳でん道どうをいふ心こころを君きみに是こゝろあり

食く一いつ是こゝろと不ふ志し不ふ心こころ是こゝろをいふ人ひと一いつは飲いん食じきを服ふく

考こうふも心こころと用もちをいふ一いつは柔じゆう弱じやくをいふ人ひと一いつは事こと

と忌て軽く愛すん〜は古人の心結と考ふ
ふ昔はあつちあるあれを忌と用ふよ
ついであつちと食ふ〜熱飯と銘するの〜
あ〜は寒暑若く熱〜場の得くの忌と用ふ
〜と〜を〜厭ふ〜を〜あ〜と〜を〜
に〜け〜ある〜熱乃因あ〜を生あ〜
標と標も冷酒と飲た〜の〜を剛強〜は
と〜と〜と〜と〜の〜の〜あ〜寸急〜

病の食傷よお〜の〜の〜遠征行に
心と用ふ不熱乃物紙食ふ〜
〜と食ふ〜〜是あ〜
〜と食ふ〜〜寸是の臆病〜
〜乃〜に情の〜
あ〜は〜と臨臨ふ〜
諸毒と解すものあ〜の野菜に塩を
を食ふ〜〜の湯〜たの〜と止水と飲〜

古井あるは汲て井水と春てく陣立たる也
古井あるは汲て井水を用ひて汲て
時時燭とて井中に下してみるは海に毒
み新水と外より投入す毒氣と散りて
下して試みて出入り消すなり古井に入
率死せると云く是れ毒水に皆相成し
と云くは毒虫毒州或は砒石かよ添はる水に
と毒あるより毒なり戒也或毒符りゆ

野系とて清水濁ると又毒めりはと潔れ
く飲て毒めると毒水の腹痛をげく嘔吐
と痛めりは是れ毒は緩ゆる也天水桶の水と
此水と同理あり夏日炎天ふ水を桶ふてあ
ちく先湯にありたるに浴するは俄に中暑
するものありしや春たりは海に毒ありし
但天目にあるといふありたるを火ふりし
毒をいぼくと毒ありかし候る物と云ふ

あそ夏月げつの移うつ更さらは入いへり以も霍くわ乱らんするは皆みな食た傷やう小せう瘧まするは形かたちのあま夏なつの食た物ものと別わかる用もち守まもり
好このむ朽く木も入いる系けい盤ばんに生なる名な菌きんを食たふ
へり陣じん中ちゆうに土つち卒そつを向むかふ物ものと捨すて居ゐる人ひとし
地ちに落おちたる菓くわいと食たふす人ひとの寸すん虫ちゆう蟻ぎのつとた
ふい大だい毒どくあり戒かい厳げんへ一いつ温おん泉せんの湯ゆも飲のむ人ひと
土つち入いり回まわり飲のむ人ひとも
濕しつ地ちの陣じん取とり時ときを必かならず病びやうと生なる陣じん取とりの得えた也なり

防禦

濕しつ氣きと不ふ向かうの毒どくと避よこる火ひより揚あがる地ちの
霖りん雨う乃なり時ときに不ふ以い火ひと焚たぐ一いつ徑けい石せき必かならず遊あそば
る人ひとの心こころを以もつて一いつ法ぽうの用もち意いある人ひとも
もつる人ひとへし九く生せいの心こころを以もつて人ひとの靈たまある人ひと
火ひと生なすとす人ひとの心こころを以もつて人ひとの靈たまある人ひと
林りん壑たく池ち鏡けい廢はい寺じ古こ塔たつ久く未み不ふ用もち而なりも湯ゆも
入いりへり況いはや寝ね那なする人ひとの心こころを以もつて人ひとの靈たまある人ひと
陰いん乃なり氣き人ひとと害がいする人ひとの心こころを以もつて人ひとの靈たまある人ひと

七中

十二

毒中惡氣とをくく一又古本好方とたる下は
 物合はすへへん況や驚懼かふすもの思へる也
 夏の本陰と毒るものあれは補の補とんて心
 命一毒生ひ夏にまされは烟一畏て踏むるの
 ろもと意外の中毒と云古洞震度ふるあ
 と遊んとては子入命一は先火と禁て後小
 又海酒入りのあは怒乃松のくく烟の
 毒入得と毒は松のくく可用洞窟の毒の前

毒烟

細子むせぬ佐
 葡萄膏と
 ふじの皮実
 を去り砂糖
 入ねて清

いらふあのみ古井の毒と同毒るの野系と毒
 火小色されたる時は是えへ火と放ち逃るこを
 くるやく焼拂ちやし古目を食ふは毒るだの毒
 削子火打袋は海あり一即是ありと越袋小用
 毒の美と入く刀指指の毒形小法ひ使へ一
 やと毒家れ虫小ええたるは烟にむせ死たり
 蘿蔔汁と飲む物一此汁と合て煙小入るとは
 むせるといふ西洋とては毒務とあからる此毒烟

あや合
みん居ると
染る細子
まあま火
車扱の丹
梅(五)

野陣

あたまの昏倒すといふ是とあせくは水浪と砂
に漬してを研を眼鼻ふぬら又密とぬるもく
とや又礬石と水お和て七竅に塗る既子毒下
中ので九竅血気出す頻に灌く
野陣をいふ大蒜葱の粉を名以合して濕氣
瘴氣と避へしきに大蒜を腰間にははく持
ぬりしおりの蒜に打身へすりしはき或は腫物の
お灸も用ゆへし寒氣と思ひては外邪と

水脈

もくよりと世下腹痛瘧疾を再ぬする物連る
軍場上の毛泥障とあぬりのあてを之に覆ふ
すまは下冷乃難を避るもあう又枕ふ茶筒を
すれく遠水の煎を敷置人馬は是音に著るに
らふとくこの空虚なるが小灸とて更らとみ
たむ
遠玉に攻入る候室にありて水おを地り陣に
もろりしあるをくに俄に井と掘らんよ先水

世中
十一

とくからへし地と掘りて元とあり曉天色と辨す
不時穴に入れて目と地際ふあそくせめハ氣を
て如烟乃りらハ水氣として水乃りあはれはそま
又氣をせむハ城邑家立れ雨ゆてハ見ゆア
す地と掘るハ之ハ度さい心乃りまき物ハ洞場
乃際ハ地をくすく一面ハゆりて穴乃中り
入て二三寸の地乃りす也やあるはとに本もあ
すり一とあくもくとひげ蓋を又そとたきを

草を一日をとりて見るハに終の夜に水氣をて
新水を持ちたるハ則ち泉なり又陶家ハをそま
あそくハ穢氣として洞場ハ通りて試るハ
しりてと泰西水法とらる書にええたり

たゞ

大軍大衆と物と耐用意あくてハ竹の葉ハ

艾 備急圓 廣東人參 枇杷散

萬病解毒丸 實國乃葉 馬の葉

あそくハ解毒丸を兼病にゆりてあたやす

毒りく

解毒

萬病解毒丸 諸毒と解し 諸毒と解し

骨蒸にふらるるを利し 百病と治し 死と治し

一生と回す 吐衄とく 述へく 凡疔毒

遠行ハ勿論とやろ 衆と解す 此薬はく

むくあつてく 一名紫金丹 一名玉樞丹

山慈姑 二兩 五倍子 同 續隨子 一兩

大戟 一兩半 麝射香 三錢

端午七夕重陽或天徳月徳黃道上在日

齊戒盛服 糲心 糲茶と末とてく 糲

糲米はとる 湯ふわ 白に入れて 糲と下

すん 糲乃糲す 一食にわ 一食 乃糲考よ

糲と用て 二云 糲乃糲と 糲とよ 糲とす

糲の 糲とて 糲

糲一切の 糲合 糲毒 糲毒 糲毒 糲毒 糲毒 糲毒

乃糲土菌 糲死 糲牛馬の肉と食して 糲に あく 糲

方ふの水はくく一丸と磨一扱す、或は吐下しと愈
 瘧症背に蕪一疔腫楊梅瘡等一切入瘰癧
 風疹赤遊とそ赤く村くに多し又瘡癩
 水或酒とそ磨して日々敷方凍るへ
 陰毒陽毒乃温疫傷寒とそ殺氣一喉痺喉
 風を薄荷の絞りに付けに之とそ水か加服す
 心氣痛とそ外の積氣とそ酒とそ扱す
 泄瀉下利霍乱絞腸痧とそ痛つとそ去るなり下

方ふの湯ゆて下す
 中風中氣に眼のいろとそ赤腫五疔鬼邪とそ
 物ふを或は物つとそ筋骨引つとそ痛に暖酒とそ用
 自溢瀉水鬼速とそ物ふまふとそ死たるとそ
 心経にあらとそかあるは多し高服す
 傳尸骨瘰水とそ服一懸物虫積とそ下す
 久遠とそに瘰癧瘰癧とそすす時とそ毒瘰癧水
 年根枝とそ煮一扱す

頭風眩痛酒少と飲て眉筋に塗る

猪腰酒鼓脹は麦芽湯とて扱す但酒を服するに代り

むし歯乃痛小酒とて飲て用也

湯火傷毒蛇悪犬一切の虫さしあし磨いて

ぬりて又服

お撲傷損杉を酒と酒小飲して用

女人經閉を红花酒とて扱す
小兒驚風五疳五痢落石湯とて用也

お撲

お撲くらとて小の鮫肉又ハ全形とすりて研とて地

はくふ骨を傷たるとてくやす焼酎とて洗を

多ふかぬ傳とてと柳の皮とてまるとてく又生

薑はちやりよけよ阿膠とて今とてとらりく塗る

又大蒜科で泥とて石炭と和して焼く塊とて七月

十日目に水中に埋て翌年此日に取出してすりとて

とてとてすりてはくると又芋麻茎葉とてに思嬌に

して扱す海馬乃とすりてとて傳とてとて又と

益とてとてとて高糊とてとて思嬌とてに塗る

馬病

馬の病と云半人の薬とて皆効あり其の方なり
息合といふものいふ人もあるといふ人に兼ふもの
吸と吐とを兼ねて呼吸するなり筋也筋と云ふ
強く強んとする時いふ人等と合むべし或は梅干
もより馬は息合ともよりとす又鹽と云ふなり
ぬり水とて燻ぬり一切乃息合の薬の皆麩
香は入るものありて解毒花と水に磨いて用
ゆべし強とも人糞とわく飲さむるに大なる

息合

なり是を好法とす又馬は時樂のまみ麻
乃切り陰核と或は核とまみとて包も法は
けるゆゑのたふはくはる角に馬を脚の事
ふくはるまの馬の疲はぬやうに乘あせむ
考にこそ技と調煉するにまのいふ

息合の方 希葉と云

人参 一两 甘草 四 辰砂 四 麝香 二葉

右細末して煉蜜を移り身かき一引汲立

て乃水ぬそ飼あり

毒州と喰公馬の膝て癒りも先口と結し洗
て上味香と煉るへ一雁馬屎甘香油子煮あり
ふふの烟又馬書と見ふかに金昔れりといふ
るるの試ぬるはとあり補ととつに記す

○金屎○カ十八女ノホソノヲ○五八霜○ヒノ木ノ粉○松脂

右五ヲ等分ニ合セ爪ノ裏ニヌリカ子ヲ當ル也其後

ニ水ヲサツトソノクヘシ廿日間如鐵可秘々々

馬乃血落をくはく鹿射香らふ二年後漢の茹
子の汁とては此をさすといふとへ送につくるを
色たる馬じとくといふも又馬病進て汗とま
後するは陰とすもこみてより陰と摺込後す
湯とて洗ふはよくいふは

諸熱乃使たるは又解毒丸を治りて痛む
喰ふ小便よく癒はとて洗ふは牙に齒垢の
浦らぬれ血一月とまらぬと出へ後たれあり

か喰

心を程に多く灸して狗牙の毒を焼尽しそ
 後解毒丸を用ひへし灸の如く赤山豆油
 魚鳥餅をどあから洗ひ毒を食とつ切れし
 目より冷やす時再灸は患の從灸の如く
 括めて膿汁出るといふとすやく愈るは
 ねとふく不道の浮ぶぬ熱湯少く洗或は
 灸の如くかけおとすへし是れ灸の如く
 灸の如く灸傷と紫金丹を用ひへし紐を

法よくむまび切へし毒氣は上
 の如く人事を押し着る紐を袴の
 如く紐をどの物より紐を着して馬上
 せんは下敷とくらされはるのさむ
 つまらる時居木のるは茶搦をくまの
 海は蒸るはるは是れは用なきは叶ハ
 ぬるの散のくの如く紐の紐を登の
 るハ邪はなるとして懸あけおるはの

蛇傷

とくまるく切りきつるは片端とすぬれ
 まぐよ下敷の歯るやうよまるくは細い何
 なるとも強解てけふべし又大便せんとき
 孕指とくつるやむぎの海のごくまじ
 蛇傷の如菜乾指と磁石糸ぬぐへ乾指
 寺院（とほ）乾指下まろく樹の葉柄とまじ
 又濃しぬめてうと磁乾指と磁石傳る赤者
 又口菜と磁石は磁火とくつる下焼く
 口菜乾指炭火と磁石推し伝るまじ又赤
 と地乃まじ黒焼めして胡麻油と傳る又煙州の
 やにをつけり又蕺菜とくつつけり又一角とまじ
 やと香く白沫と吐く白董根と水にすまじけを
 傳る乾指いと方まじとくつつけり乾指乃方
 傳るまじ方まじ珊瑚膏とくまじ

氣絶

艾灸のまじ乾指へし一才一氣絶ふ神瀉又く下
 寸關元腑の左右天樞（はふ）に灸すし手是れ

虫歯
脚氣衝心
唐木瓜
栴櫚三味
新キ品細末
姜ノニホリ汁
ニテ用ユ陳中
クシリ脚氣
極急ナル時
川姜ノニホ

汁ハカリ用
ユ或ハ童便
ヲ用ユル香
シ其上足
三里ハ灸ヲ
多クスヘシ

管に灸してより又腫物の位に灸するなり 蒜と
痛く灸するに難く
血の新らふ寸口中乃痛に極更虫歯の類に必領
中喉の左右に栴と結ぶものありと云くは京
灸五壯つす灸へ一日して強かへハ翌日と續
て灸ゆる又是ハ大指乃腹ノ横紋の外は灸る
灸して喉痺にぬるも濕地小片そ脚の腫る
ぬハ日々に三里と風布に灸すし十壯りの云す壯
はむろへ水あふりもに天樞小灸すし一復冷
たり後よりより崔固小三里と新桓小灸すし
又大指と食指乃骨の灸也小灸谷と灸穴ありと
灸すし一虫歯もより
諸病諸毒虫歯使たるに灸して若踏板もて灸蒜を
踏く灸するハ新く踏板たる後ハ回之極熱の地
かへ入るるハ水海もよし被傷風に
なる也被傷風行りありたるも極に灸すし

踏板

脚氣衝心ニ 吳茱萸唐木瓜栴櫚三味
新キ品細末姜ノニホリ汁ニテ用ユ陳中
菜無ク極急ナル時ハ姜ノニホリ汁ハカリ用ユ
或ハ三里便ヲ用ユルモよし七壯足ノ三里ハキハ
引多クスヘシ口食傷或菜無キあり極急
菜無キ時ハ地ヲ踏三天灸り入カキマセ七壯スミハ時
ハハ灸ヲム

脚氣衝心ニ

吳茱萸唐木瓜栴櫚三味
新キ品細末姜ノニホリ汁ニテ用ユ陳中
菜無ク極急ナル時ハ姜ノニホリ汁ハカリ用ユ
或ハ三里便ヲ用ユルモよし七壯足ノ三里ハキハ
引多クスヘシ口食傷或菜無キあり極急
菜無キ時ハ地ヲ踏三天灸り入カキマセ七壯スミハ時
ハハ灸ヲム

踏杖をんうとあせ地て草鞋のるは革とつと
 又鼻返しする是の多に入て潤かぬ進は系
 成て用心ふ成るあ一其線とかかあ力うへ
 水と持てたて幾度しお時いきた人草鞋
 かく成是とつゆとと人もとととに革力
 鼻かへ一寸水ぬ入てある竹と津又とと
 一足盛へ六粒又をばかへし此線と入て靴
 すし此かきと此仕方のあへんあきととと

○骨硬

千小児
 木の葉お
 のどはタナ
 タルニハ蜂
 室ヲ欣シム
 又蜂室ハ水
 蛭ノ毒ヲ
 アヤマツテ水
 フノミタルニ
 蜂室ヨシ
 又
 木炭ノ皮
 細末ニシテ用
 骨硬妙

おりておけ不便利る進とよ地やとほつし
 其線の用意のきこに具是をま綿り包
 一其尻ふ持行いき靴法とと靴子ぬか
 かく防くあ一陣中へ大衣服と多く推か
 そあちりよお邪とけりも症種ととと浸
 又魚骨喰ふたらたら何ふ飲とあて成か
 丸して焼へ一魚骨線につととととと
 ひとと具是靴力肉に棒脳と入つとと

兜乃受法へ樟腦の氣を引む慈ちとん
頭と熱痺一甚くそい昏眩す其海ふふ
そ氣あると身にまゝかての煩悶する必疑ふ
ゆ好ん試めりゆ也さおんたふ甲胃して
さふ働く何の道とて眩するものあり
或強迫ふあたること五ありく外科を技を海せ
とと玉の出る海に若む江戸を町に丁目中村
伊も湯とつもの神如散とてけ後の買とる

ひびき

又竹本刺ニ
附ルハ風仙
花系実トモ
まおまホホ
是捷麻伸
ニテトキ附ル
止齒又キホ
是ナリ

ある酒をて用らに玉すもやふおて平後す此
糸の掃葉和葉はゆみの糸とて用の中り
糸とて糸焼少して酒とて服す是即神如散の
とと度と散に奇強あ魚骨の骨ふらち
ちるにとて一諸のとけ授ありと又芭蕉の葉の
糸焼るりともつと見の未法葉の筋乃授かてん
あまのし又芭蕉の根と生うとて挿るる水に
とておしとて雪つとて乃て用ゆとての瘦熱と解

炒

すこころのり前遊の骨に入れて執すよりぬくぬく
巴豆くわんご微妙して鏡娘きやうにやう塊根と猫捕ねことらと同搗て如身にんしんの暫
あやそ痛退て必痒出る支と忍て居ると極めて
痒つよく忍ぬる時臧物して是と抜跡の金瘡の
手あそりう茶遊肉に入あるの種結汁あして
こに滴らゆらむ夜して自出る人杏仁とろそ
傳又明佳麦末して酒にて服を何事も隠たふ
兩胸膈咽喉の骨もぬくるといふ予未試也

宛ア音

備急

此毒茶の肉と忍ると毒より外をとり松皮
乃人の瘡并茶ふあたるとたる大いにくく証を
ぬるに候ると候ると方あるは茶と醫源よて
と同くくく毒一卵に油るも得む可也
備急圓 大食傷大霍乱の如美俄小腹痛
くげくく氣絶したるに用ゆるとふあそ
の即吐くふあそくふすかりと又教日馬と
くそ風ふあそく内風眼と痛ゆる痛強ふ

用を下以

サト 巴豆 麩

大黃

乾薑

粉青

右細末こすりしを瓦せ紙包しして煮し懐中に
断じ貯るへし又馬のさうまつ海に用ゐ
奇驗もて及ふに四分と用也馬のさうまつを
用ひしをへし人の倉傷かき他の二分
許すも宜し

金瘡

金又傷の外種ふあしと他の諸症ありのりけ

通じしとあふりし醫者来らんやうて清かき時
もいしと爰に神妙の法を傳へ舟す無日に
乾血あしは後日小膿と傳へて治せざるもの外
焼酒と湯と出りしと洗ふ焼耐ふくは焼酒を
利ぬまらぬく人尿と用ゐへし洗へ後の雜卵の白
みを水で温然乃粉と和して搦せ紙く摺合して布に
傳へしと膏葉の如くして紙包と合して是とを紙
紙にりしとをふりしり紙極妙なり布を

力帯

力帯は瑞と切て用ひし金瘡の人の嘆怒喜
 笑大言力妄想熱物飲酒酸鹹と禁忌すし
 昔よも水と忌こつと世入の心憐るがみの害
 くの物も是湯子用ひつゝに髪川流すは
 如春すつとまほ水く血は葉を用ひ力帯
 と本綿一幡と志ぐに散のく何ろと大つらに
 海ゆくに通しと朋と引あけ並て志つとまじり也
 是慈具乃秘法とすいそ也志つとまじり也
 志つとまじり也

見若あゆふかく且ハ志心とよく久ま後程一と也
 希以不足陣中ハ布本綿ハ臆もたつとゆ
 へまゆ好進と世帯しうと帯も入用は又
 よるも七しとかる樹を瑞と切て志つとまじり也
 志乃一と守又白布あそハ血塗好と潔たつ時ええ
 至す地やうに紺色に潔つとまじり也又甲冑は家
 地ハ目立たつと色と隙ええと敵乃秘つとまじり也
 へそ心憐るをと良と守志つとまじり也力帯と不知の

澄ふる散乃くつろきにくさめふと仕付たる製
あまじと恙あつともこの也佐子脈所と切きハ凶と
このあやも予瞽目のか疵とて卒死をらぬ人見
たゆも少くハかぢらひうち血に製すくさけり

眩暈

着有鼻して働と心ハ氣逆上して眩するこの也
塊乃眉がさしけめく輪と全根と不好赤細筋不
するハ眩せしめの損るまじりの又見切しと夕照
朝暉をくぬハあけと也め初時利らにち辰砂益

元散よりとつるまき方 滑石 甘草 辰砂 石 右二

右細末して水服すと又ゆれとくハ三黄湯とつる

この程よりまきとつる三黄湯方 黄芩 大黃 連中

右黄少くして散服するもよりありとて用は

狂言所 金瘡血暈發熱狂心吐血眼目赤痛風

眼腫痛流卒病卒倒或ハ小兒驚風婦人血行とらに

用せよ煎服するハ本法也婦人血逆狂心ハ女子

用らるにて扁鵲の火齊湯とくハ此薬なりとて

舟車

船乃あるハ其驗此多ある故の沙汰なる後之を
ゆふふと驚き新めと辨くして用ひ若又舟車
如くハ著振と用幸味成不知ハ事乃是也
ふく用ゆせと醒かへし舟車結むとするハ磁
と臍中につめてより

○食傷或ハ
菓毒ニ當リ
極急ニ治ス
トキハ
地ヲ三尺掘
水ヲ入カキマ
セモ上スミタ
ル時ウ口水
ヲノム

食傷

食傷しける時備急圓餅ハやく燻竹を煎し
徳へし吐すも也又脱肛と洗ふ人ハ痛去て入る
速るの又吐せむとて吐すことあるハ
と湯にゆてぬらくして燃焼するも
あてとばせぬハ身翅と雀子入舟探るへし

血苗

桃花散 金瘡吐血 血下血 一切乃ちと也
茯苓 葛粉 三反 紫礞 少加 芍薬 此に
すく香とにサユをて目と困て多とまのり
立不不解り也又血苗 燻竹と併又艾と併か
鏡面系 天名精 希蘇の薬 何色も揉し
山吹乃也もつける 森血の経にす 又鯨の

粉をてつけり人^ひを傷^やむ血^ち四方^{しやう}に流^{なが}して
うらにく^くらの粉^{こな}を^まじへ^て焼^{やく}く^つ堀^{ほり}乃^のゆ^ゆ血^ちの
流^{なが}る^るとせ^せぬ^ぬあ^あて^て中^{ちゆう}の^の血^ちを^をあ^あの^のさ^さかけ^{かけ}ぬ^ぬたり^り也^也
鯨^{くじら}も^も張^{ちやう}の^の提^{てい}燈^{とう}の^のち^ちに^にす^すま^まの^の陣^{ちん}中^{ちゆう}み^みと^とま^ま
又^{また}石^{いし}灰^{かい}を^を使^{つか}ひ^ひと^とよ^よく^くあ^ある^る膏^{かう}養^{やう}れ^れ血^ちを^を使^{つか}ひ^ひと^とよ^よく^く
あ^ある^る是^{こゝ}の^の血^ち乃^のこ^こら^ら一^{いっ}切^{せき}の^の茶^{ちや}と^とし^し又^{また}猪^{ちゆう}母^ぼを^を使^{つか}ひ^ひ
使^{つか}ひ^ひに^に使^{つか}ひ^ひて^て也^也ま^まの^の血^ちと^とし^し又^{また}猪^{ちゆう}母^ぼを^を使^{つか}ひ^ひに^に使^{つか}ひ^ひて^て也^也
使^{つか}ひ^ひる^る也^也布^ふに^に巻^まき^きて^てあ^ある^るを^をよ^よく^くと^とし^し又^{また}猪^{ちゆう}母^ぼを^を使^{つか}ひ^ひに^に使^{つか}ひ^ひて^て也^也

廣東
人參

この^{この}氣^き之^の形^{かたち}の^のめ^める^るは^は唐^{たう}東^{とう}人^{にん}參^{じん}と^とし^し武^ぶ氏^し煎^{せん}後^ご
可^か是^{こゝ}の^の二^に七^{しち}と^とま^まの^の一^{いっ}切^{せき}を^を補^く血^ちす^すの^の妙^{めう}茶^{ちや}と^とし^し偶^ぐ
記^きふ^ふ裁^{さい}り^り其^{その}終^{しゆう}を^をり^り記^きす
金^{きん}又^{また}傷^{やう}箭^{せん}疔^{ぢゆう}打^{うち}身^{しん}血^ち出^でて^て不^ふ止^し醫^いて^て使^{つか}ひ^ひ
血^ちよ^よ一^{いっ}丸^{わん}と^と使^{つか}ひ^ひ乃^のど^どり^り湯^{たう}と^とし^し用^{よう}也^也
男^{なん}女^{にょ}傷^{やう}寒^{かん}は^は齒^し間^{かん}か^かぬ^ぬよ^よ薑^{かう}薑^{かう}と^と同^{どう}く^く齒^しよ^よぬ^ぬ
又^{また}薑^{かう}湯^{たう}と^とし^し一^{いっ}丸^{わん}と^と用^{よう}也^也
男^{なん}女^{にょ}打^{うち}身^{しん}ま^まく^く腫^{しゆ}た^たる^るよ^よ一^{いっ}丸^{わん}と^と使^{つか}ひ^ひ乃^のど^どり^り湯^{たう}と^とし^し用^{よう}也^也

眼とや方と困いづれかいづれふいづれをいづれかいづれめいづれ いづれ

赤白痢子いづれ一いづれ飯いづれのいづれ湯いづれをいづれ用いづれ也

虎傷いづれ酒いづれ一いづれ飯いづれをいづれ用いづれ也 いづれ

出毒いづれ毒いづれにいづれ遇いづれて いづれ

と返いづれにいづれかいづれ

喉痛いづれ痺いづれ一いづれ飯いづれ湯いづれをいづれ用いづれ也

心氣疼痛いづれ一いづれ飯いづれ湯いづれをいづれ用いづれ也 いづれ

又醬いづれ酒いづれをいづれ用いづれ也 いづれ

○肉刺

救急指方

テ赤螺殼

半隻二味ノ

方アリマメ

ニハ半隻ナキ

ニテモ功アリ

平日懐中スベ

キヤナリ

又赤螺殼

糸糊ニ和シ

紙ニノベテ

足心湧泉

ノ穴ニ貼ル

知名の腫毒いづれ或いづれはいづれ癰疽いづれ等いづれ乃いづれ疼いづれ不いづれ止いづれ一いづれ二いづれ飯いづれ湯いづれ

一いづれといづれ漆いづれ又いづれ醋いづれ一いづれ五分いづれといづれ加いづれ用いづれ也

下血いづれ小いづれ四いづれ物いづれ湯いづれ一いづれ五分いづれといづれ加いづれ用いづれ也

杖傷いづれ或いづれはいづれ又いづれ傷いづれのいづれ癰血いづれにいづれ癰いづれのいづれ天いづれといづれ不いづれ傷いづれ之いづれ傷いづれ

又杖いづれといづれ行いづれといづれすいづれ時いづれ小いづれ先いづれ一いづれ飯いづれ湯いづれをいづれ用いづれ也 いづれ

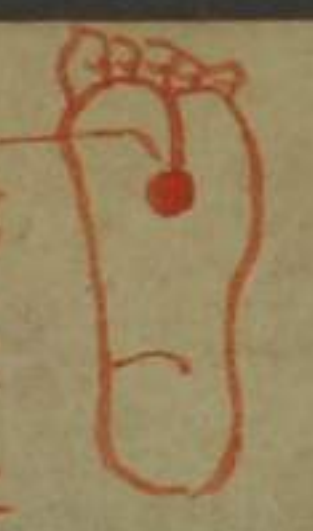
心いづれ不いづれ衝いづれ寸いづれ杖いづれ後いづれにいづれ用いづれ也 いづれ

婦人杖傷杖傷いづれ酒いづれ一いづれ飯いづれ湯いづれをいづれ用いづれ也 いづれ

婦人杖傷杖傷いづれ酒いづれ一いづれ飯いづれ湯いづれをいづれ用いづれ也 いづれ

小兒瘡癩小兒瘡癩いづれ酒いづれ一いづれ飯いづれ湯いづれをいづれ用いづれ也 いづれ

トキハク
タビヨメ
シテ云フ妙
ナリ



湧泉止
足心陷中
ニアリ
右マメノ葉

火傷極妙
葉別テ火
葉ニテノ火
佛ニハ

佛堂イモ
摺リテ油
極妙極ナリ
始末家ノ
秘法ト云

火中

三十一

豆れそ見つゝに燈州の油や火飯のりといふ
へ御馬鞍療もいふ又豆にを島ふ生すふ
半夏の根とくらたを御又豆にわく火防の蓄
椒もすりけくふ又艾葉とあやう草餅し
おひ成く見よ火と豆心にともみ候へ
湯火傷水入るるやゆれ候けけるいふ糞
中に入らう又い津くるさう
糞の毒を解すもの也
食毒し月日毒の毒子
息をふかして用し妙きのはいふと云ふにわけるはとも用かひぬ

又杉の葉を焼りして灰汁を和し候又石を
粉おとく加テの油を和し候飯を焼りし
油を和し候又胡椒細く搥てぬる又人おの
土層は下の水を蒸てつける又湯中を灰を
入るる水と水と洗ふ又馬糞と水とを
つゝあつめしやけとハ煮よ治まる時ハつ
て煮し油よ油よてあつめるの候候し玉
子の白みよ黄梅の粉を和し候候

七言

廿八

又砂糖（あま）をうすく（うす）してその中にいさぐ時（とき）はやく
種（たね）粉（こな）を加ふ大癩（おび）ハ敷（し）して内攻（うちこう）するの
三黄湯（さんわうとう）と用（もち）べし穢（けが）汁（じゅう）はあくね死（し）する
者（もの）多（おほ）く一（ひと）癩（おび）瘡（かさ）房（ぼう）至（いた）燒（や）りて之（これ）油（あぶら）にて
解（と）傳（た）る

手不龜（てんき）方（ほう）極（ごく）のわがう（う）熱（ねつ）身（み）ハ（は）瀉（げ）屋（や）一
又酒（さけ）三升（さんしょう）胡椒（こしょう）十二（じふに）文（ぶん）吹（ふ）く熱（ねつ）ト（と）て（て）是（こ）は
ぬるべし

溺死

溺死（ひやくし）ハ（は）懸石（けんせき）と粉（こな）を（を）て志（し）死（し）りては鼻（び）は吹入水（ふきいりみづ）を吐（は）
すものじりく之津（このつ）を溺水（ひやくすい）と救（す）ふ俄（は）に明熱（めいねつ）をく
て醫（い）のしと此者（このもの）を甜瓜（てんか）へ（へ）子（こ）をけら（ら）に急（いそ）に湯（ゆ）で
救（す）たりと當（あた）りてゆ（ゆ）り（り）雞冠血（けいこんけつ）又象牙（ぞうが）粉（こな）
何（なに）も鼻（び）に吹入（ふきい）る肛門（くわんもん）より血（ち）乃（すな）出（い）たるもの
是（こ）は去（い）指（さ）強直（きやうぢく）にさめぬら（ら）ハ不活（ふかつ）と寸山雀（すんざく）懸羽（けんう）
てと羽（う）乃（すな）中（な）く（く）黒糖（くわくとう）を（を）て熱（ねつ）をへぬ（ぬ）溺死（ひやくし）一宿（いっしやく）と経
ぬると尚救（なほすけ）へし皂角（さいかく）と搗（た）緒（じょ）に包（つつ）み肛門（くわんもん）より入（い）る

又死人のあまを肩にき死人と背ふ載て擔か
をり吐水して活す又壁と折崩しに及死人を
仰よ卸しめまよと小墮とと腰の口眼よ去けつら
ぬ扱すしし自強し水出へし身あくるも氣たえ
たるも此法を拜みて活ぬといふも救法なりと
寤むしし又砂と炒て死人と覆か面ら下し著
て口鼻をわし砂かえり又かゆへし又砂を蓋と
して鼻中に挿し臍上ふさすの百壯

秘法出の何れは筋と一を扱ふ命なり也水より
かすし一管とをそのあ身と吹く夏末と自鼻中
吹入し鼻用は末と穀道中かゆし夏月あ
る溺人の腹と扱ふ半は背かきて牽り續く
ゆきしめい腹中か水自強し口中よりもと鼻
大便よりもと流出身か生々湯とと蕪香飛
瀝と或は生善湯中と扱し但如何ふた右
人しし扱押ししし半あく人乃背たらふ

既し牛のあひひやふ執る也く冬月ありハ
 多ふ濕る衣とるる瘧と妙布袋ふ包み胸
 の内を敷し厚くお抱して電は肉の灰と
 多を抱りたる補て漏人をそとに覆外を
 下小綿の枕とそとみ又厚く灰とかけそと
 被褥と加ふ灰乃眼目に睫をけりん扱ふるおり
 口を用て様ふ能と合せ蕪香圓と生姜湯て
 月を管とん身鼻肛門と飲葺ぬのい夏月の

凍死

通ふす一冬天より醒ぬる後温酒と妙妙ぬ
 夏天より粥と飲し扱するに灰性煖うて熱水と
 扱攪乃湯を死なるもの灰とん埋む是の頃を
 即活す此時驗るの 蕪香圓と生姜湯
 凍死は是強直歯とるの ぬるるといこと微氣
 ある者く大獨をそ灰と妙て扱り成たる時袋
 ふ入る心上と敷し冷たぬい又換へ一固と固くと
 候て温酒及が粥とめくふへ一も一も一も一も

七言中

四十一

あためはしとよくたにさけら内冷氣と
 火氣と争ひて必死と也冬月溜水して衣服
 も凍るがも人事ゆると但骨下暖温あつて
 救ふゆかろへしと微笑する安あつてよく
 その口鼻と掩ふへし知して不出との救つる
 あつて又俄に火に迫くへし火と
 又る時と大驚して救ふあつて
 凍死した救得たる時と生まはるとと掩くた也

壓死

凍死したる時と水之を一盞に飲して温服す
 壓死睡中に忽然として死する也此中悪くす葬
 するに心と以男子の左を右の鼻の内へ刺入る
 りと七寸あるは目開き血出る時に即ちよみのる
 又上唇肉小粟米粒の如き物あつてかけ
 破るへし又上唇を縫ふ志ありて鼻中に志あり
 する處を握り握りかゝりて又齋中へ
 灸するゆひ百は鼻中小粟角末と吹入る或る

五ノ四
五ノ五
蕪の汁を耳中へ灌入くわんにゅう又生薑せいじやう蒲ぼと研くわん汁じゆを
て一盞と灌入くわんにゅうふ

驚死

驚怖きやうふして死したると温酒おんしゆ一盞と灌くわんく撲うちし
て猝死そつしたると及および絶ぜつると心既こころ温あたた暖かあつた日ひと色
ぬらと亦また救得きうとくたるとぬらと先死人せんしにんを盤ばん脚きゃくて
去入きよにんの死入しにんの髪かみと控くわんせ生薑せいじやう末まと竹筒ちやくとうの煎せん之
紙筒しとう葉え乃の管くわんして鼻中びやくちゆうに吹ふへし幸さいふ治ちす
付つく生薑せいじやう自じ撰せん汁じゆを吹ふすくわん一盞いっせん交かうれ毒どく殺ころす

治すといふ

按小生薑末を湯中死小鼻より吹入すといふ
鼻筒末同法より撰らば生薑乃毒と解す

五ノ五
生薑と生薑末を湯中死小鼻より吹入すといふ
鼻筒末同法より撰らば生薑乃毒と解す

陣中ちんちゆうに疫病えきびやうと肺氣腫はいきしゆう満まんと喘ぜんりすか心こころ得とく居ぐ
つとつと也陣中ちんちゆうにかつつ士し卒そつ病びやうのかつつ
轉てんるか又また人ひと子こすつつつ士し卒そつ下げ士し卒そつをかつつ
古この良將りやうしやうのつとつとあつたると人ひと心こころと得とくすつ

癰

人勝利もはやせり此史籍小堅心へ一薬合
 ことにて示しぬくサの物もあらはして共由
 多者と因くすと良將といふありと是子
 と卒の勝物とぬて膿をとりしうあると是
 膿をぬひ腐肉は移る所なくぬてりやく治す
 こと膏薬よりと速ぬるく人の死力と是所
 めんいそふ厚くいつるあまをぶいて病を
 懐ひつるあり瘡の好薬は田螺と蕎麦粉と

瘡

と朽すやせ腫物れ口に入る時、ぬかゆは腐肉
 肉を煮るとにまなるよ
 濕氣不あたる瘡の發する事、まうい瘡の外
 のサもあまきれ、ハあまれ指の股よりかゝ血は
 ちへ一針をぬくハ小刀の尖を皮膚を穿切ふ
 紙にて拭きぬふいふ及がすくふ血出さるる迄
 左右よりハあれ身こえとハ圓といふ又脊より
 大椎とてえりすと伏すれと大骨あつとるけの

下骨乃之に二三壯發日此子朝小多すらし
も一ちらざるい再灸す壯救と増す一之
おらとれおの敵と神理して令入一又紫陽
花と一あせせん一飲一之解毒地と月日
極よ後一用極大解毒地の下に之也

淋

淋病ハ黄柏がその皮多分おつ一用也又車前
子一布に包み水二升と四分お煮つ一用也又
か竜馬やとと一してとゆ一用也又龍樹の物
と去水よく飲

小瘡

志のいせん諸瘡を外より傳葉すれの内攻と水
腫乃如小玉の情む一と一也一い一と一湯水
葉湯傳葉いせま一也一也死小玉の一時見
更をむと日救と終て吹もせぬと傳葉入湯を
す一も一内攻したる一備急地と利を下すし
濕瘡乃葉の叢葉根葉ととに湯乃たごうた
ふ中に入るとけゆとて口を度もたると時い又裁

木根者多胡麻油を傳る二百ヤ〜して治す
志のれ〜も必子傳ふ〜又内攻志〜んと是
た〜の愈〜る病ふ備急圓とすの傳出ひの
を中〜ひ〜

茶湯

入湯の方 荆芥 防風 薄荷 各三十枚

生枚葉 生忍冬 各二百目 鹽 一客半

右大稠〜して二日〜して七日入る外子湯の
花根者三十枚木綿紙を八ひ〜してたれ付る

脱肛

脱肛の方 靈天蓋細末〜して漉して濾る

又方 石胡荽と〜つけり 藜藜と藜藜と

いせん〜洗ふ煙州のゆ〜おふ記寸然膽と

と見つけり一角とつけり牛糞と糞とあ〜めり

腫瘡

腫瘡 靑澗乃相油合研此紙〜して〜

藜藜の葉と火とあ〜めり包むと〜

藜藜の根と〜し〜し〜し〜

毒刺

海鵝魚の汁ふ〜れたる樟木〜して〜

こくゆ

経乃冷たる後血不止ハ薑北灰^{くわい}思^しくわけた
ると侍へし後小痒^{かゆ}ありハ瘡^{かさ}子^こ成^{なり}り^を煙^{たき}州^{しゅう}
乃やにを侍

水あた

水あたりの食傷^{じきやう}子用^{こよう}ひ^ひ并^{なり}子^こ暑^{あつ}濕^{しつ}を拂^{はら}ふ^ふ不^ふ換^{かん}
金正氣散^{せいせいさん}と^とつ^つを^を醫^いふ^ふも^も乞^いて^て飲^いつ^つし^しも^も茶^{ちや}
煎^{せん}む^むの才^{さい}是^こして^{して}調^{てう}合^{ごう}せ^せる^るこ^こう^う一^{いち}服^{ふく}乃^の多^た
量^{りやう}と^と記^きす^す中^{ちゆう}用^{よう}心^{しん}乃^のく^くす^すも^もこ^こい^いの^の是^こ好^{こう}り

蒼朮^{そうじゆく} 四分 陳皮^{ちんぴ} 三分 藿香^{くわくかう} 五分 半夏^{はんげ} 四分

厚朴^{こうぼく} 三分 甘草^{かんさう} 四分 生薑^{せいじやう} 二片

右水一盞半入つ^いる^る不^ふ煎^{せん}用^{よう}木^{もく}香^{かう}一分 乾姜^{けんじやう} 三分

黃連^{わうれん}一分と加へく^く食傷^{じきやう}霍亂^{くわくらん}吐逆^{とぎやく}乃^のつ^つて^て起^{おこ}ふ

用又^{もち}大^{だい}黄^{わう}二^に分^{ぶん}と加へく^く下^げの^のも^もり^り
薬品その科の品を調合すべし

河豚^{かぶつ}子^こ破^{やぶ}ち^ちの^の胡^こ麻^まの^の油^{あぶら}を^を生^{なま}く^く多^たく^く飲^いて^て吐^はす^す

残^{のこ}り^りと^と守^{しゅ}備^び急^{きふ}固^こと^と用^{よう}ゆ^ゆふ^ふの^の煎^{せん}り^り

鯉^り小^{せう}碎^{さい}し^しの^の椿^{ちん}の^の葉^はを^をえ^えく^く用^{よう}ゆ^ゆ又^{また}大^{だい}根^{こん}乃^の絞^{しぼ}汁^{じゆ}を

魚毒

飲犀角或ハ一角と用ハ元より好メ於テの合仰
リ解毒飛と用備急死を用ハ粒文ハ紙ニ
際ニ記す

突目

突目乃菜 馬乳つをこめふとや

纏氣 主腸ノ紅花と腹
下ノくまは一多

明礬 五かむと如ふ
字をこす

及鼻 馬焼しそ一多

右突目小乳をこし入眼瘀より血の出るも為る

乳乃も此時の只やうとすんまゝ

救飢

飢人と云へ合と與つるに先赤土と水小かきたて
書楹を飲せ後又合とあたふへ一赤土をかき
土のむら時ハ清らふふたより土糞水とら又厚朴
とせん一と一楹かと飲するも一此二法をせぬ
並に合せしむる時の忽ふ死するもの也

吾人の郷丹雜を碎り時ハ白茅根を洗を淨し細
みして或ハ石上に晒し乾搗き粉として水下り
きぬと服す此ハ辟穀不饑と云ふは外方多

といへども急ふにひかたきハ記すよとく婦

又赤大豆一升大豆一升半を炒搗粉して一合を

新水にて服し日ふ二夜三夜と用ひ尽せハ十一

日ともし不眠又洗大豆とく人の津液不便の

去てくもして虚瘦せむと云

竹中半を湯飴と扱方

松の木汁を油でた 日ふ干細末を斤

人参 一両 白米 五合

右三種粉してくねりて小瓶し蒸し粉子

し一匙を軍兵十五人配分するに二日行

きともものなり

味噌と旅中に持つるの煮茶葉を包こく

はとふはふ味を交せし又舟小餅をうつる時けき茶

葉を汁小煮て合すは使と云 依く舟之序

辟穀軍律第一の方

白餅一斤 南天燭子

氷砂糖 各半斤

右蕎麥粉乃粥とろと桃實ももの大おほの丸まる一ひとと
厚あつ小こ一枚と服はくす身みハ不ふ飽ぼ戰せんゆゆ喉のど
碎くだ水みづとて服はくすれハ氣き不ふ之の飯いひ食くと全ぜん欲よく
多おほ時ときハ塩しほ湯ゆとて解かけ先ま急いそぎいせ傳つたへ
方かたちちううななにに記しす

砒霜石びじょういしの毒どくよよいいるる河かのの春はる石いし三さん支しと水みづ
よよ和わして用もちゆべし

原子げんし子し柔じゆう示し此こゝ一ひと小こ冊さつ
子し。檢けん閱えん一ひと邊へん還えん之の。子し
柔じゆう貽い厥くわく孫そん謀まう之の意い厚こう
矣や。世せい人にん鏡きやう函くわん中ちゆう宜い具ぐ
之の書しよ也や。刻こく成せい之の後ご請しん

惠我一本。

文化元年甲子冬

翠軒老人題



鶴見弘書



南陽原先生著述既刻目錄

瘕狗傷考 一卷

經穴彙解 八卷

砭艸 一卷

叢桂偶記 二卷

叢桂亭醫事小言 七卷



文政元寅歲初秋再校

江戸浅草茅町三丁目

須原屋伊八

書林

水戸本町三丁目

須原屋安次郎

津田藏書

秘傳朱肉割衣方

七宮信法他云
不て有書

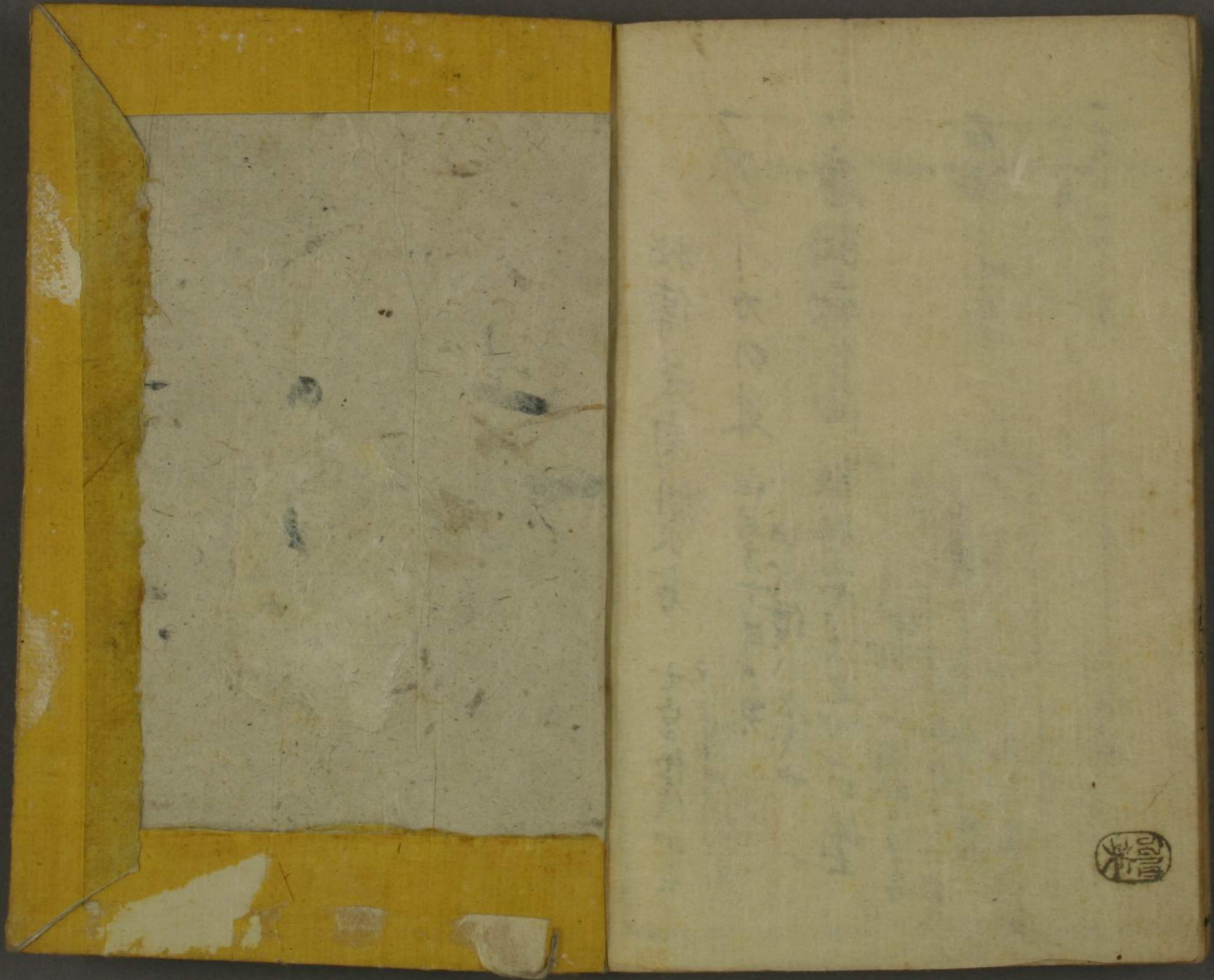
一アメリカの糸

他目方十目
は代價八九割也

一唐胡麻の油

位板本やまハヒマニの油云

右油と名乗るしは糸と油とを合せ
いれしは糸を糸肉極細き子糸糸を
加るなり
一又ハ糸とせんトさらハ分より下ゆ



10120

